

陵墓の多面性について

外池 昇

はじめに

陵墓の何たるかについて考える時、これまでは陵墓管理の実態と「文化財保護法」の定めるところを対比させて考える機会が多かったと思われる。しかし、近年の「百舌鳥・古市古墳群」の「世界文化遺産」への登録に関わる動向は、それとはまた異なる方向性を示しているであろう。つまり、陵墓や文化財について単に国内法やわが国の官庁の動向を根拠に議論しているだけではもはや足りないのである。

それとも関連することなのであるが、文化庁による「日本遺産」、つまり地域の中にあるものとしての陵墓をめぐる動向も新たな動向として注目されよう。右にみた「世界文化遺産」にかかわる動向をグローバルな動向とすれば、こちらの方はそれに較べればローカルな動向といえる。そのような二つの動向からは、いったい陵墓のどのような面がみえてくるのであろう

か。

しかしグローバルだのローカルだのといったところで、本稿の主題はあくまで陵墓である。陵墓が陵墓たる所以はそこが聖域とされることに他ならないが、それでは、陵墓が聖域とされたのはどのような歴史的な経緯があつたことなのであろうか。それを明確にすることを抜きにグローバルだのローカルだのといっても、所詮それは砂上の楼閣に過ぎない。

本稿では右の問題提起を踏まえて、まず陵墓が聖域とされたことの歴史的な意味を明らかにし、その上で、グローバルな動向とローカルな動向それぞれによる陵墓のあり方の検討を行うこととしたい。

一 陵墓と文化財

本章で取り上げようとするのは、陵墓は聖域であるべきなのかそれとも文化財であるべきなのかをめぐるそれぞれの言説の拠つて立つ由縁である。以下それぞれについて俯瞰し、次章以降の議論に備えることにしたい。

まず、陵墓は聖域であるべきとする言説についてみることにしたい。このことに関して最も特徴的なのは、政府、あるいは宮内庁が繰り返しそのように国会で答弁していることである。その最新の例をみよう。『神社新報』令和元年七月二十二日付によると、政府は七月五日に、

次のような「答弁書」を決定したとする。

陵墓については、御指摘の「百舌鳥・古市古墳群」を構成するものを含め、現に皇室において祭祀が継続して行われ、皇室と国民の追慕尊崇の対象となっていることから、静安と尊厳の保持が最も重要であると考えている。このため、陵墓への立入りにについては、その管理に必要な場合以外は厳に慎むべきものと考えており、参道および一般拝所を除き、一般来訪者の立入を認めることは考えていないが、学術研究上の観点から必要不可欠な立入り要請に対しては、陵墓の本義に支障を及ぼさない限りにおいて、これを許可している。

これは、同年六月二十一日に国民民主党津村啓介衆議院議員（当時）から提出された「宮内庁によつて陵墓に治定された古墳に関する質問主意書」に答えたものであるが、その主旨は従来の陵墓についての答弁と全く変わらないものである。⁽¹⁾

問題はこれをどう見るかということである。ここに「皇室において祭祀が継続して行われ」ているというのはまさにその通りであつて、祭祀の主体はあくまで皇室（さらに言えば天皇）なのであり、決して政府ではない。まして宮内庁ということではあり得ない。この点が見誤られてはならない。つまり政府（あるいは宮内庁）は、祭祀の主体である皇室の意を体してこの

ようにいつているのに過ぎない。

もちろんここで、政府（あるいは宮内庁）が皇室の意を体して国会でこのように答弁すること自体を問題とすることもできようが、本質的なことを見極めようとするのなら、皇室による祭祀そのものについて考えることの方が余程賢明である。

皇室による陵墓の祭祀について極めて大局的にみれば、明治四十一年九月の「皇室祭祀令」に従って、そして終戦後の皇室令の廃止によりその法的効力を失なった今日にあつても事実上それに基づいて、皇室による陵墓への祭祀はなされ続けているのである。⁽²⁾ そのことと、政府がいう所の「国民の追慕尊崇」を加えたものが、陵墓が聖域であるべきとすることの根拠である。

次には、陵墓は文化財であるべきとする言説についてみることにしたい。もちろん、必ずしも陵墓の総てが文化財とされる必要もないのであるが、問題は、文化財としての価値を充分に有する陵墓が文化財指定を受けられないでいる場合である。これに関して興味深いのは、一般に、宮内庁が陵墓として管理している場合にはそれが文化財として指定されることはないが、それには例外があるということである。つまり、陵墓と文化財の二重指定の例が若干ながらもみられるのである。表「陵墓と国史跡の二重指定」の通りである。同表を手掛かりに、陵墓と文化財の関係について考えてみたい。

同表を一見すれば、陵墓と文化財の二重指定がなされる場合の具体的な様相が極めて明らかである。つまり、まず陵墓があつて、その後に保存のための方策が特に必要となつた場合に、必要な部分をその都度文化財として指定するということなのである。(補註1) すなわちこれは、陵墓

表 「陵墓と国史跡の二重指定」

陵墓 (陵墓参考地・陪冢) 指定年月日	国 史 跡 指定年月日	所 在 地
畝傍陵墓参考地 明治30年9月15日指定	丸山古墳 昭和44年5月23日史跡指定 昭和58年1月12日追加指定 平成28年3月1日一部解除・追加指定	奈良県橿原市五条野町
藤井寺陵墓参考地 大正5年10月14日指定	城山古墳 昭和33年1月21日史跡指定 昭和41年3月14日追加指定 平成27年3月10日追加指定	大阪府藤井寺市津堂
応神天皇陵は号陪冢	墓山古墳 昭和50年2月22日史跡指定 平成7年2月21日追加指定 平成26年10月6日追加指定	大阪府羽曳野市白鳥三丁目
仁徳天皇陵へ号陪冢	丸保山古墳 昭和47年7月25日史跡指定	大阪府堺市堺区北丸保園

<p>応神天皇陵 維新前確定</p>	<p> 応神天皇陵古墳外濠外堤 昭和53年10月30日史跡指定 昭和60年1月31日追加指定 平成元年1月24日追加指定 平成4年12月28日追加指定 平成6年3月23日追加指定 平成7年2月20日追加指定 平成15年8月27日追加指定 平成23年2月7日追加指定 </p>	<p>大阪府羽曳野市誉田</p>
------------------------	---	------------------

（註）天皇陵の指定は、『陵墓録』（国立公文書館内閣文庫所蔵）による。

陵墓参考地の指定年月日は、昭和二十四年十月『陵墓参考地一覧』（宮内庁書陵部宮内公文書館所蔵、拙著『事典
陵墓参考地』（吉川弘文館、二〇〇五年七月）所引）。

国史跡指定年月日等については、文化庁ホームページ内の「国指定文化財データベース」による。

の管理を十全ならしめるための文化財指定ということができる。従って両者の関係は決して文化財が優位ということではなく、それどころか対等などということですらもない。この関係をより具体的に理解するためには、「国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献する」（「文化財保護法」第一条）べき文化財の上位に、「現に皇室において祭祀が継続して行われ、皇室と国民の追慕尊崇の対象となっている」（右記の政府答弁書）陵墓が置かれているという構図を想定すればよい。

二 聖域としての由来

陵墓は聖域であるべきとする言説は、前章でみたように「皇室において祭祀が継続して行われ」ているのであれば一見自明の理であるかのようなものである。しかしこれにしたところで単に「祭祀が継続して行われ」というのみで、それがいつい何時からどのようなようにして始まったのかについては全く述べていないのである。そうであればこそ、陵墓は聖域であるとするものの由来を繙くことによつて見えてくるものはある筈である。

聖域という以上は、その場所は周知のものでなくてはならず、現地は良好な管理のもとに置かれていて当然である。かつ、何らかの祭祀が現地でなされ続けているべきでもある。だとすれば、今日陵墓が「皇室において祭祀が継続して行われ」ていることの淵源はそれ程古いことではない。以下、幕末から明治にかけての時期に焦点を当ててこの問題について考えてみたい。

といつてもこの場合、ただ漠然と陵墓と一括りにして考えてしまつて良いものであろうか。幕末から明治にかけての陵墓をめぐる動向について考えようとするのであれば、神武天皇陵について考えるのが最善と思われる。何と言つても神武天皇陵は初代天皇の陵として重んじられ、以下にみる孝明天皇をめぐる動向にあつては天皇陵の中でも専ら神武天皇陵が取り上げられ、また文久の修陵にあつても神武天皇陵は一番初めに普請に着手されかつ完成され、さらに

いえば総ての天皇陵の中で最も多額の費用が投入されたのである。この時期にあつて神武天皇陵は、陵墓一般を象徴する存在であつた。

それではまず、幕末期に神武天皇陵に関する事柄が朝幕間における重要な懸案として浮上した経緯についてみることにしたい。以下、『三條實萬手録第二』（日本史籍協会、大正十五年一月、東京大学出版会より昭和四十七年十一月に覆刻）からみるが、これについては、武田秀章著『維新时期天皇祭祀の研究』（大明堂、平成八年十二月）の「第三章文久・元治における神武天皇祭の成立」および清水潔監修『神武天皇論』（檀原神宮庁、令和二年四月）の田浦雅徳・長谷川怜著「第五章幕末・明治の神武天皇論」に拠るところが大きい。

嘉永六年十二月に、武家伝奏三條實萬は関白鷹司政通から、京都所司代脇坂安居に対して孝明天皇の神武天皇陵への祭祀についての「内慮」を伝えるよう命じられた。その「内慮」とは、孝明天皇は神武天皇陵について兼々心を碎いているが、神武天皇陵に祈念の初穂を奉納する旨追々仰せ出される考えであるから心得ておくようにとの内容であつた。そしてこれに続く部分では、「且在来陵所ト申唱候處相違之趣茂異説等有之候へは何分得ト被取調³」とある。つまり、当時幕府が神武天皇陵として管理していた塚山（大和高市郡四條村）には「異説」があるから調べ直せということである。ここに幕府の管理する神武天皇陵は朝廷によつて明確に否定されたのである。以降幕府は、神武天皇陵の真陵を探索する動向を顕著にする。

この嘉永六年から翌安政元年にかけては、ペリーの来航、家慶の薨去、プチャーチンの来航、家定の将軍宣下、日米和親条約締結等といった朝幕間における極めて大きな懸案が相次いでいる。そのような中で神武天皇陵をめぐる動向の浮上であることには注意が向けられなければならない。

さて安政二年四月には、奈良奉行所与力中條良藏等が神武天皇陵ではないかと思われる場所として神武田（ミサンザイ）（同郡山本村）内の「小丘壹ヶ所」と「芝地壹ヶ所」を検分し、その詳細についての「御陵并帝陵内歟与御沙汰之場所奉見伺書附」⁽⁴⁾を作成した。

以降神武天皇陵の新たな候補地は、この神武田（ミサンザイ）と、『古事記』の示す神武天皇陵の所在地（畝傍山北方白檮尾上）を比較的満足させる畝傍山の山腹にある丸山の二箇所⁽⁵⁾に絞られ、前者は谷森善臣、後者は北浦定政の主張するところとなった。

そして文久二年閏八月八日には宇都宮藩主戸田忠恕による「修陵の建白」が幕閣に提出された。それが容れられると宇都宮藩士等は畿内の天皇陵の検分には出向いたものの、暫くは神武天皇陵の所在地は未定であり、従って他の陵の普請にも着手出来ないままであった。

この論争に終止符を打ったのは孝明天皇である。翌文久三年二月十七日に左の通りの孝明天皇による「御沙汰」があった。

神武天皇御陵之義

神武田之方ニ御治

定被 仰出候事

尤丸山之方茂廉末ニ

不相成様被

仰出候事

右二月十七日夜御達⁽⁶⁾

これが、神武田（ミサンザイ）が神武天皇陵であることの根拠である。また、それには条件が付されていたことも忘れられてはならない。「丸山」も「廉末」にしてはならないとされたのである。

同年二月二十四日には、勅使権中納言徳大寺実則等は神武天皇陵（神武田〔ミサンザイ〕）に参向し、修陵奉告祭が行なわれた。⁽⁷⁾以降、奈良奉行所の監督のもと宇都宮戸田藩による大がかりな「普請」が敢行され、同年十二月八日には、神武天皇陵として完成された神武田（ミサンザイ）に参向した勅使権中納言柳原光愛は陵前の拝所で宣命を捧読し、修陵完工の奉告祭典が行なわれた。⁽⁸⁾

そして、同年八月十三日の詔勅で示された大和国行幸計画では、「神宮」への行幸の前に「神武帝山陵春日社等御拝」がなされることになっていた。⁹⁾これは、いわゆる八月十八日の政変によって結局実現されることはなかったが、ここには、この時期において神武天皇陵に与えられた意味付けがよく表されている。

また、神武田（ミサンザイ）の神武天皇陵としての整備に伴ない、拝所が陵前に設けられたことは注目される。これは、神武天皇への祭祀がその陵の現地でもなされることを前提としたもので、これ以後、文久の修陵の対象となったすべての天皇陵に拝所が設けられたのである。ここに天皇陵は、現地における祭祀の対象として確かに位置付けられた。

とは言え、陵墓の現地において祭祀を行なおうとする方向性を史料の上で確認できるのは、明治三年十一月二十八日の「御追祭定則」まで待たなければならなかった。五十年に一度の祭典を勅使以下が「御陵所」へ参向して行なわれないといふのである。¹⁰⁾省みれば、嘉永六年十二月に関白鷹司政通が武家伝奏三條實萬に孝明天皇の神武天皇陵への祭祀についての「内慮」を伝えてから十七年、文久三年二月に孝明天皇によって神武田（ミサンザイ）が神武天皇陵とされてから七年を経過してのことであった。

その後の注目すべき動向としては、明治十年二月十一日に明治天皇が神武天皇陵を親祭したことが挙げられよう。¹¹⁾これは、同年一月二十四日から七月三十日までなされた大和国及び京

都巡幸の途次になされたものであるが、特に、紀元節にあわせてのことでもあり、注目されて然るべきである。

ここに神武天皇陵は、その現地において天皇自らによる祭祀が行なわれる場所として強く印象付けられることになった。聖域としての神武天皇陵の完成である。それはひとり神武天皇陵のみならず、文久の修陵で修補の対象となった天皇陵全体についても同様であった。

こうして成った天皇陵の姿は、基本的には今日みられる聖域としての天皇陵の姿の原形といえるものであるが、ここにみた通り、その姿の前提として孝明天皇の攘夷へ向けた強い意志があったことは記憶されて然るべきであろう。

三 「世界文化遺産」として

令和元年（二〇一九）七月六日、ユネスコの世界遺産委員会は「百舌鳥・古市古墳群」の「世界文化遺産」への登録を決定した。「百舌鳥・古市古墳群」の「世界文化遺産」への登録の最大の特徴は、何といってもその「古墳群」の主要部分を、そして極めて多くの部分を宮内庁が管理する陵墓が占めていることである。登録を報じる翌七日付朝刊から見出しをみれば、『読売新聞』に「仁徳天皇陵など49基」とあるほか、『朝日新聞』に「仁徳陵」世界遺産に登録、「日本経済新聞」に「仁徳陵」世界遺産に決定、「産経新聞」に「仁徳陵世界遺産／陵墓で

初、古墳群49基」等とある通りである。

まずは、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟のホームページ等によって、世界遺産についてみることにしよう。昭和四十七年（一九七二）十一月にパリで開かれた第十七回ユネスコ総会で採択され昭和五十年（一九七五）十二月に発効した「世界遺産条約」（正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」）について、日本は平成四年（一九九二）六月に締結した。これに基づいて世界遺産を登録するには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示された十の「登録基準」のうちいずれか一つ以上を満たすとともに、そのデザイン、材質、機能などが本来の価値を有していることなどを示す「真実性」（オーセンティシティ）や、顕著な普遍的価値を示す「完全性」（インテグリティ）の条件も満たさなければならず、かつ、国内法による適切な保護管理も求められる。

世界遺産は文化遺産と自然遺産から成るが、そのいずれにしてもそれぞれが独自にたどってきた歴史的経緯が必ずあるのだから、そもそも統一の規格による検討などできる訳はないと思われる。しかし、それでも右の条件に照らして考えなければならぬ。この度、「世界文化遺産」に登録された「百舌鳥・古市古墳群」には宮内庁が陵墓として管理する多くの古墳が含まれているが、そのような古墳には、極めて僅かの例外を除いて一切立ち入ることができないこととはよく知られている。そしてその理由は、それらの古墳が皇室による祭祀の対象であること

によるものである。「一陵墓と文化財」でみた通りである。だとすると、「百舌鳥・古市古墳群」が「世界文化遺産」に登録される場合には、概ね次のような問題が生ずるのではないかと思われる。

① 宮内庁が陵墓として管理する古墳には、立ち入りが厳しく制限されている。そのために古墳としての学術調査がなされていない。そのことの当然の帰結として、固有名詞までとはいかないとしても、例えばどのような人が葬られているのか等ということすら学術的な証明はできていない。宮内庁が〇〇天皇陵としているといっても、それは今日の学術的な水準を反映してのことではない。

② 古墳は築造された当初と今日とはその姿を大きく変えている。例えば、築造当初墳丘上には樹木は全くなかったと思われるが、その後長い年月を経て樹木が生じるとともに、周辺の村落の再生産の過程に組み込まれる中でそれに相応しい植生に改められ、あるいは城郭として利用されていた。それが、明治期以降になると今度は次第に陵墓に相応しいものへと植生は改変されていったのである。^⑩ いったいどの時点をもって古墳の本来の姿とみたらよいのであろうか。

③ 宮内庁が陵墓として管理する古墳には、「文化財保護法」が適用されていない。かと言って

陵墓について規定する「皇室典範」にも陵墓の管理のための具体的な規定はない。これによって、国内法によって適切な保護管理がなされているといえるのであろうか。

- ④ ①でみた宮内庁の管理の理由は、皇室による祭祀の対象であるというものである。それならば、陵墓とされている古墳を「世界文化遺産」として登録するに際しては、皇室による祭祀をも含めての登録の可能性をも視野に入れて考えるべきではないか。

しかるに、この事態を迎えての宮内庁の反応はどのようなものであったのか。登録決定前の六月二十七日の定例記者会見で、山本信一郎宮内庁長官は「登録は、世界的な意味での遺産であるということで、陵墓の趣旨と一致している」と述べた（『毎日新聞』令和元年（二〇一九）七月八日付朝刊「クローズアップ／『百舌鳥・古市』公開に壁」）。そして『神社新報』令和元年（二〇一九）七月十五日付「百舌鳥・古市古墳群が／世界遺産一覧表に記載」は、「百舌鳥・古市古墳群」の世界文化遺産登録に際しての坂井孝行書陵部長の談話を載せていて注目される。

宮内庁としては、皇室御祖先のお墓としてその『静安と尊厳』が損なわれないことを前提に、今後とも陵墓を含む世界文化遺産の保全に向けて必要な協力を行なっている所存です。

なんと宮内庁は、「静安と尊厳」が損なわれないのなら「世界文化遺産」の保全に協力するということである。それをいうのなら、まずは陵墓とされている古墳への「文化財保護法」の適用を考えるのが筋だと思うのであるが、いったいどうしたことなのであろうか。

このように事態は複雑である。しかしそうであればこそ、陵墓とされている古墳について、仮に陵墓としての管理を解かないまでもその全体を史跡に指定するということは充分考慮に値することではないか。なぜなら、先にも述べたように「文化財保護法」の第一条は「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」というものであり、「世界文化遺産」の主旨にもよく適う。この条文は国内法における文化財行政についての指針として素晴らしく、まさに国内の文化財は等しくこのようにあるべきではないか。仮に陵墓と史跡の二重指定であったとしても、それが先にみたような陵墓が上位で文化財指定が下位というものではなく、両者が対等でしかもその全部が史跡指定されるというものであるならば、否、まさにそのような二重指定であつたればこそ、日本国憲法の規定する象徴天皇制のもとでの古墳管理のひとつのあり方として、まさに評価に値するのではないか。

さてそれでは、「百舌鳥・古市古墳群」の「世界文化遺産登録」を報じる各紙の記事から検

討することにした。『神奈川新聞』令和元年（二〇一九）七月七日付「49基驚きの〃満額回答〃／百舌鳥・古市古墳群／復元巡り激論、一部除外覚悟」との見出しの記事は、本稿の趣旨からも重要な指摘を含むものである。共同通信の配信であろう。ここに述べられているのは、先にみた「真実性」（オーセンティシティ）についての解釈をめぐる認識の差である。

問題となったのは、整備の方法。世界遺産の登録には「オーセンティシティ（真実性）」、すなわち「本物であること」が求められる。人の手を極力加えないのが望ましい、という考え方だ。

陵墓を訪れた委員は、宮内庁が市民の立ち入りを制限し、厳粛に管理する姿を高く評価。「パーフェクト。これなら真実の姿が未来に伝わる」と感嘆していたという。

ここで「委員」というのは、ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）の委員である。記事の先を見よう。

これに対し、日本の文化財行政は「復元整備」が基本。地下に埋もれた遺跡の価値が分かりやすいよう、建物や状況を復元する——という論理だ。

堺市は、寺山南山古墳に発掘で確認した円筒埴輪はにわを並べて当初の姿に復元、墳丘にも登れるようにする計画だった。古墳とはどんなものか見せたい、という意図だったが、委員は「今のままでいい。それが真実性だ」と全否定したという。

藤井寺市では、鍋塚古墳や助太山古墳で崩れた墳丘に土を盛っていた。

焦げ茶色の腐葉土が積み重なった墳丘に、黄色っぽい真砂土を盛った現状に、委員は「なぜ手を加えたのか」「オリジナルと同じ土を使うべきではないか」と指摘。

同市の山田幸弘世界遺産登録推進室長は「土を盛らないと、風雨で墳丘の崩壊が進む。あえて違う土を使ったのは、オリジナルの墳丘と区別できるから。いつでも元に戻せる」と力説した。

まず前段である。ここで重要なことは、宮内庁による「厳粛」な管理についての評価である。これをイコモスの委員が「パーフェクト。これなら真実の姿が未来に伝わる」というのであれば、それは事実上宮内庁による陵墓管理への無条件の賞賛である。宮内庁による「厳粛」な管理の理由は、すでに述べたように皇室による祭祀の対象であることだが、イコモスの委員はその理由での「厳粛」な管理を賞賛しているのではない。「世界文化遺産」としての価値の「未来」への継承のための方策として、宮内庁による「厳粛」な管理は「パーフェクト」だと

いうのである。それにしてもイコモスの委員は、「百舌鳥・古市古墳群」の「世界文化遺産」への登録にあたって、宮内庁による「厳粛」な管理がたどって来た経緯やその実態についてよく理解した上でこのようにいつているのであろうか。その結果宮内庁が陵墓として管理する古墳について、学術調査がなされていない現実もよく承知しているのであろうか。

それに、右にみた「百舌鳥・古市古墳群」が「世界文化遺産」に登録される場合の問題点の②で指摘したように、古墳の墳丘の植生は時期によって変遷してきたのである。現在宮内庁が陵墓として管理する古墳の植生は、陵墓としての尊厳を強調するのに相応しい常緑樹を主体として構成されているが、それは、それまでの周辺の村落の再生産の過程に組み込まれていた落葉樹を主体とした疎林から殊更に改められた姿なのである。これをもって「真実の姿」などと断じられてもそれは違うのである。イコモスの委員はいったい何を「真実の姿」の基準としているのであろうか。

後段である。今度は古墳の「復元」の方法が論点である。もちろん、堺市の言う「当初の姿」に「復元」するばかりが「地下に埋もれた遺跡の価値」を分かりやすく見せるための方法でもないであろうが、今日ではしばしば採用される方法ではある。むしろ古墳の「真実性」を考えればこそその「復元」とも思われるが、イコモスの委員によればそれは違うのである。現状のままを全く手を加えないことに価値を認めているのであろうが、もしそうであれば、「世界

文化遺産」に登録された時点の状態が最も好ましい状態として後世に伝えられることになる。そういうことも場合によってはあり得ようけれども、必ずしもそのような場合ばかりとは言えないのは勿論である。

この記事の続報とも言える記事を紹介しよう。右の『神奈川新聞』の記事の一年後の『読売新聞』令和二年（二〇二〇）七月二十日付（夕刊）『「古墳復元計画」暗礁に／世界遺産百舌鳥・古市』『地元3市見学施設でPR／ユネスコ』『真実性担保を』』である。いまみた寺山南古墳の「復元」をめぐる動向のその後である。

同記事によれば、堺市が寺山南古墳を令和四年度までに盛土で墳丘を復元して、墳丘上に見学者が上って「履中天皇陵古墳」を望めるようにする方針であったものが、ユネスコに反対されたというのである。その理由について同記事は次のように述べる。

この方針に異を唱えたのがユネスコだった。昨年の登録決定時には「整備する場合は真実性を担保すること」を求め、早計な復元にくぎを刺した。背景にあるのは、世界遺産の「真実性」を保つために人の手を極力加えないのが望ましいとの考え方だ。

3市（引用註、堺市・羽曳野市・藤井寺市）は復元について理解を求めてきたが、ユネスコ側の姿勢に変化はなく、工事を当面見送る方針。事態の打開に向け、今年度中にはユネス

コに影響力がある海外の専門家を招いて協力を得たい考えた。

これによれば、ユネスコ（あるいはイコモス）の「復元」についての姿勢は「世界文化遺産」への登録から一年を経てなお微動だにしていないことが明らかである。

もともと堺市による寺山南古墳の復元計画が、寺山南古墳の墳丘を盛り土によって復元して、見学者がそこに上がって「履中天皇陵古墳」を望めるようにするものであったのであれば、何も寺山南古墳そのものの価値を踏み台にしてまで「履中天皇陵古墳」を望む展望台など作らなくてもよからう、との考え方も大いに成り立つであろう。

本章で指摘し得たのは、数多く存在するであろう「世界文化遺産」としての陵墓をめぐる問題のうち、ごく僅かの部分に過ぎない。より正確に言えば、いったいどのような問題が存在するかということさえ本章では明らかにし得なかったのである。

「世界文化遺産」としての陵墓をめぐる問題について注視することは、わが国の古墳文化を世界史のレヴェルで考察することに結びつくのであろうが、それとともに、宮内庁による古墳管理について根本から問い直すことにも繋がってゆくことであろう。なぜなら、宮内庁による「厳粛」な管理へのイコモスの委員による賞賛は、決して宮内庁による陵墓管理の経緯や実態への深い理解に基づいてのことではないと思われるからである。

本稿の段階では「世界文化遺産」への登録からまだ日も浅く、登録前後の詳細な経緯を示す資料にも恵まれていない。このためここではこれ以上の議論は控えざるを得ないが、いずれ矛盾は何処かには表れてくることであろう。

四 地域の中で

本章では、より範囲を狭めて地域の中の陵墓について考えようとするものである。ここで地域と言う場合、取り敢えずは市町村を、さらにはその中の一部を想定することにする。

まず注目したいのは「日本遺産」である。文化庁による説明を聞こう。文化庁のホームページから「日本遺産」のポータルサイトに入ると「日本遺産とは？」とのページがあるが、そこには、「主旨と目的」の欄がある。引用する。

我が国の文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るために、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらの活用を図る中で、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていくことが必要です。

文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日

本遺産 (Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援します。

世界遺産登録や文化財指定は、いずれも登録・指定される文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを目的とするものです。一方で日本遺産は、既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがあります。

こうしてみると、まさに「世界文化遺産」の国内版ではないか、あるいは国や自治体による文化財指定の焼き直しではないかとも思われるが、さて陵墓との関係についてはどうなっているのだろうか。

この「日本遺産」は現在一〇四件認定されているが、その中に三重県多気郡明和町による「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」（平成二十七年認定）がある。これに注目して、陵墓に関する問題を提起した論考がある。

『中外日報』平成三十年十二月五日付は、北井優那氏（成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻博士（前期）課程、当時）による「地域の『遺産』どう価値発揮？／陵墓の日本遺産

指定は異例」「『文化財』となった伊勢斎王の墓」「住民伝承、明治期に女王墓決定／不採用墓所は町指定文化財に」との見出しの論考を掲載した。¹³⁾ その要旨を本稿との関連からまとめると、以下の通りである。

・明和町には宮内庁が管理する陵墓として、醍醐天皇皇孫隆子女王墓（明和町大字馬之上）がある。隆子女王は斎王として斎宮に赴き同地で亡くなった。斎王とは伊勢神宮の祭祀に奉仕する未婚の内親王・女王であり、その住居である斎宮が営まれたのは現在の明和町にあたる。

・隆子女王墓は、やはり同地で亡くなった後白河天皇皇女惇子内親王墓（同町大字有爾中）とともに、宮内省による墓としての決定を目指して明治十六年三月に馬之上村・有爾中村から三重県に上申された。隆子女王墓は同年七月に決定の旨宮内卿から県令へ達せられたが、惇子内親王墓は決定に至らなかった。

・昭和五十八年に、惇子内親王墓とされていた地は同町指定文化財惇子内親王伝承墓として指定された。

・平成二十七年度には、明和町が「日本遺産」として申請した「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」が認定された。これには、宮内庁が管理する隆子女王墓も構成文化財とされている（ただ

し、町指定文化財の淳子内親王伝承墓は構成文化財とされていない。

・わずかな例外を除けば、宮内庁が管理する陵墓が文化財に指定されることはない。隆子女王墓が「日本遺産」の構成文化財とされたことは、この点で大変興味深い。

注目すべき点は明瞭である。すでに本稿「一聖域か文化財か」では陵墓と文化財の関係を、「国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献する」〔文化財保護法〕第一条）べき文化財の上位に「現に皇室において祭祀が継続して行われ、皇室と国民の追慕尊崇の対象となっている」（すでに引用した政府答弁書）陵墓が置かれているという構図であることを説明したが、この明和町による「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」では、この構図は当てはまらないのである。つまり「日本遺産」の「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」では、宮内庁が管理する隆子女王墓は、他の構成文化財である斎宮跡（国史跡）・斎宮跡出土品（国重要文化財）・竹神社（野々宮）・祓川・竹川の花園・斎王尾野湊御祓場跡・大淀・業平松・佐々夫江行宮跡・カケチカラ発祥の地と同列に位置付けられているのである。

そうかと思えば、同じ「日本遺産」でも、陵墓との関係についてこのような例もある。

河内長野市による「中世に出逢えるまち―千年にわたり語られてきた中世遺跡の宝庫―」（令和元年度認定）は、観心寺（同市寺元、国指定史跡）をはじめとする観心寺関連の国宝・重要

文化財等、金剛寺（同市天野町、国指定史跡）をはじめとする金剛寺関連の国宝・重要文化財等、長野神社本殿（同市長野町、重要文化財）、烏帽子形八幡神社本殿（同市喜多町、重要文化財・国指定史跡）、烏帽子形城跡（同市喜多町、国指定史跡）、また高野街道、天野街道、巡礼街道等を構成文化財とする堂々たるものである。しかし、同市に存する宮内庁が管理する以下の陵墓等は構成文化財には含まれていないのである。

- ・後村上天皇檜尾陵 河内長野市寺元観心寺内
- ・光厳天皇分骨所 同市天野町金剛寺内
- ・コウボ坂陵墓参考地 同市寺元観心寺内
- ・檜尾塚陵墓参考地 同市寺元⁽¹⁴⁾

これらが構成文化財に含まれていないのはなぜなのであろうか。後村上天皇陵や光厳天皇分骨所は、「中世に出逢えるまち―千年にわたり語られてきた中世遺跡の宝庫―」の構成文化財にいかにも相応しいと思われるのであるが、いかがであろうか。コウボ坂陵墓参考地と檜尾塚陵墓参考地には公的には被葬者が充てられてはいないものの、宮内庁の内部文書ではともに「後醍醐天皇女御尊称皇太后藤原廉子（新待賢門院）」を「該当御方」として充てている。⁽¹⁵⁾こ

れについても同様に考えることはできないのであろうか。

右にみた明和町による「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」の例に従えば、当然これらは構成文化財とされて良い筈である。それがここでは含まれていないというのは、同じ「日本遺産」といつても、陵墓がその構成文化財となり得るかどうかにについては統一の基準など無いということなのであろうか。それとも、何か別の理由があるのであろうか。大変興味深い問題ではあるが、ここでこの点について判断するための材料を持ち合わせていない。

さらに、自治体と陵墓の関係ということでは、次のような例も存する。

著者はかつて清和天皇皇子貞元親王墓について論じたことがあるが⁽¹⁶⁾、その際の論点を本稿との関連で述べれば概ね次の通りである。

・貞元親王墓については、上総国周准郡貞元村（千葉県君津市貞元）説と伊賀国名張郡大宿村（三重県名張市大屋戸杉谷神社）説とがある。

・両説のうち、上総説については近世の紀行文・随筆にみられるが、明治期に入ると三木貞一郎によつて上総説が『学芸志林』（第七巻第四十冊、明治十三年十一月）に掲載され、それへの反論として浮田渡による伊賀説が『東京日日新聞』明治十四年一月十五日付に掲載され、さらにそれに対する再反論として三木による上総説が『東京日日新聞』同年二月一日付

に掲載された。このうち『東京日日新聞』に掲載された二点の論考は、『学芸志林』（第八卷第四十四冊）に転載された。

・右の経緯は、貞元親王墓をめぐる公開討論の趣を呈するものであるが、結局、上総説・伊賀説のいずれについても貞元親王墓の宮内省による決定はなかった。

右によれば、上総の貞元親王墓をめぐる言説は近世から諸文献に記され、明治期には伊賀説を含めて公開の場で討論もされたものの、宮内省による貞元親王墓の決定はなかったというのである。

ここでは、この内上総説について見ることにしよう。今日、千葉県君津市貞元三七五には君津市指定史跡として「貞元親王墓」（ていげんんのうはか）が存するが、同地には以下に示す石塔・石柱・石碑・揭示があり、「貞元親王墓」の由来について知ることができる。

- ・「延寶（表面）戊午天七月十五日」「清和天皇第三皇子／貞元親王御廟」と刻された石塔。
- ・「貞元親王壹千年祭」（裏面）「昭和四十五年二月二十六日建之 貞元區」と刻された石柱。
- ・「貞元親王境内地／移管記念碑」（表面）「文化財保存に関／心厚き君津市の／要請に応じ従来／の管理権者たる／貞元自治会は親／王の祭祀の万全／に思いを致し所／有权並に管理権／を君津

市に移す／仍つて茲に記念／碑を建立し後世／の資となす／昭和四十九年三月吉日／貞元自治会」

・次の通りの説明のある君津市教育委員会による揭示。

「君津市指定史跡

ていげんしんのうはか

貞元親王墓

所在地 君津市貞元三七五

昭和四十五年九月二十一日 指定

貞元親王は、清和天皇第三皇子として生まれ、貞観十五年（八七三）年四月に親王となられた。伝承によれば、親王は近江の地で長くその任にあたっていたが、故あつて須恵の地に下向したといわれている。

親王は、しばらくの間この地にて、土地の人々に近江の国から持ってきた「れんげ草」の種まきを奨励し、米作りの肥料として効果のあることを教えた。このため当地方では、この草のことを「親王草」あるいは「貞元草」と呼び、盛んに栽培したといわれている。

史跡内にある唐破風付丸柱型の供養塔には、「延宝六年（一六七八）七月十五日」の紀年銘が刻まれており、親王の愛妃「お万の方」とゆかりの深かった平野家の祖先が建てたものと伝えられている。

古来から土地の人々は、親王の徳を偲び、遺髪いはづを納めたびようしよ廟所として尊信してきた。

平成十九年十二月

君津市教育委員会

※ 注意 ※

史跡の保存のため、付近でたき火・土取り・樹木の伐採等は絶対しないこと。

これによると同地には、延宝六年七月十五日に「清和天皇第三皇子／貞元親王御廟」との石碑が建立され、昭和四十五年二月二十六日には「貞元區」により「貞元親王壹千年祭」が挙行され、同年九月二十一日には君津市指定史跡とされ、昭和四十九年三月にはこれまで「貞元親王境内地」の管理権者であった「貞元自治会」は、「親王の祭祀の万全に思いを致し」、かつ「文化財保存に関心厚き君津市の要請に応じ」て、所有権と管理権を君津市に移管した石碑が建立されたことが知られる。

この経過からみえるのは、何といっても祭祀が占める割合の大きさである。しかもその祭祀の主体は、まさに「貞元區」なり「貞元自治会」なりといった地域の人びとに他ならない。そして、管理権者である「貞元自治会」が「貞元親王境内地」の所有権・管理権を君津市に移したのも、「親王の祭祀に思いを致し」たがためであり、かつ、その君津市が「文化財に関心厚

き」ことがその前提であつたのである。

ここに見えるのは、陵墓というもののさらにもうひとつの側面である。先にもみたように、この貞元親王墓は宮内省の決定を受けていない。つまり、今日宮内庁の管理下にはないのである。ということは敢えて言えば、天皇、あるいは皇室による祭祀の体系からは自由だということでもある。その上での自治体による「貞元親王墓」としての指定があつたということは、宮内庁によつて管理されている陵墓以外にも、陵墓、つまり歴史上の天皇・皇族の墓地が社会の中で存し続ける余地があることの雄弁な証明ではないか。

このような、宮内庁の管理下にはないけれども自治体が文化財指定をしている例は、恐らく全国規模の調査をしてみれば多く確認できるであろう。そのような例の個別の検証の蓄積からは、宮内庁による陵墓の体系ばかりからでは決して見えてはこない何ものが、人びとと陵墓が織りなす何ものか（あるいは陵墓伝承と言うべきか）が確りと見えてくる筈である。さらに言えば、自治体による文化財指定も受けていない例もさぞ多いことであろう。将来の陵墓研究は、このような陵墓（あるいは陵墓伝承）をも範囲に含めたものになることは間違いない。

おわりに

本稿では陵墓について、その聖域としての由来を繙きつつ、「百舌鳥・古市古墳群」の「世

界文化遺産」としての面、また地域の中における文化財としての面について議論を重ねてきた。

これらを総じて陵墓の多面性ということが仮に許されとしても、本稿で述べることができたのは、そのように考えることもできるのではないか、という見通しに過ぎない。しかも本稿における議論はあくまでも陵墓という文言にこだわった上でのものなのであり、その実体としては、陵墓というよりもむしろ古墳なり、墓地なり、供養塔なり等として捉えた方が余程正確であり、しかも分かり易いことであろう。そのような批判があれば、それは甘んじて受けなければならぬ。

しかし本稿が陵墓との文言に終始拘泥したのには、もちろんそれなりの意図があつてのことである。それは、陵墓の有する幾つもの面について考えることを通じて、天皇・皇族が歴史上どのように捉えられてきたかを、あるいはそれがどのように変遷してきたかを、少しでも解明する手掛かりを得ようとしてのことなのである。陵墓という文言は、決して墓地一般を指すものではない。天皇・皇族の墓地という強い限定を前提とする文言である。そのような文言を前提とした議論であることにこそ、本稿の狙いが凝縮されている。

それにしても、「世界文化遺産」をめぐる一連の動向を契機として、天皇・皇室による祭祀の対象として宮内庁が管理する陵墓には、内外からのさまざまな視線が投げかけられた。それ

らは総じてみれば、グローバル化の波といって良いであろう。この方向性はもう決して後戻り
はできないものである。それが充分わかり切っているからこそ、宮内庁はこの事態を事実上是
認しているのであるが、「二聖域としての由来」で述べた聖域としての陵墓の由来を省みれ
ば、それと「世界文化遺産」としての陵墓とは、そもそも相容れるようなものではないことは
明白である。今後の動向を注目したいと思料する所以である。

註

- (1) 『神社新報（平成三十一年令和元年）縮刷版』（令和元年四月一日）。
- (2) 拙稿「近代における陵墓の決定・祭祀・管理」（『歴史評論』第六七三号、二〇〇六年五月）「七昭和
二二年『通牒』」九十九～九十一ページ。
- (3) 『三條實萬手録第二』一五九ページ。なおこの部分は、『孝明天皇紀第二』（平安神宮、昭和四十二年
七月）嘉永六年十二月是月条（二六六ページ）にも引用されている。
- (4) 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵。『高市郡墳墓誌』（高市郡役所、大正十二年三月、昭和四十六年十二月
に名著出版より覆刻）（六十二～五ページ）にも部分的にはあるが翻刻されている。ただし、本文の
「〔内〕の〔御陵并帝陵内歟〕」（傍点引用者）とある「并」は『高市郡墳墓誌』では「井」と誤植され
ている。
- (5) 拙稿「『文久の修陵』における神武天皇陵決定の経緯」（調布学園短期大学『調布日本文化』第九号、
平成十一年三月）。

- (6) 『谷森家旧蔵』山陵関係史料(下) (宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵)。
- (7) 武田著『維新期天皇祭祀の研究』六十一ページ。拙稿「中条良蔵『庁攬』にみえる神武天皇陵修補の発端」(成城大学民俗学研究所『民俗学研究紀要』第三十七集、平成二十五年三月) 七十八〜八十ページ。
- (8) 武田著『維新期天皇祭祀の研究』七十八ページ。
- (9) 『孝明天皇紀第四』(平安神宮、昭和四十三年八月) 文久三年八月十三日条七九七〜七九八ページ。
- (10) 拙稿「近代における陵墓の決定・祭祀・管理」『三明治三年『御追祭定則』』八十一〜三三ページ。
- (11) 宮内庁『明治天皇紀第四』(吉川弘文館、昭和四十四年八月) 明治十年二月十一日条五十六〜五十七ページ。
- (12) 拙著『幕末・明治期の陵墓』(吉川弘文館、平成九年五月) 第二章「村落と「陵墓」——明治政府の陵墓政策——」第二節「村落と周濠・墳丘——河内の巨大古墳——」第二項「村落と墳丘」。
- (13) 同記事のもととなったのは、北井氏が成城大学文芸学部文化史学科に提出した平成二十八年年度卒業論文「三重県多気郡明和町の斎王墓の研究——治定墓と治定外墓——」(外池ゼミナール) である。
- (14) 『陵墓要覧』(宮内庁書陵部、平成二十四年三月)。
- (15) 拙著『事典陵墓参考地——もうひとつの天皇陵——』(吉川弘文館、二〇〇五年七月) 四十九〜五十二ページ。
- (16) 拙著『幕末・明治期の陵墓』第三章「陵墓伝承と明治政府」第三節「貞元親王をめぐる伝承——上総・伊賀の貞元親王墓——」、初出は「貞元親王をめぐる伝承について」『地方史研究』一九八五年六月、第三十五卷第三号)。

補註

(補註1) 表「陵墓と国史跡の二重指定」の内、「応神天皇陵古墳外濠外堤」の昭和五十三年十月三十日の

史跡指定の「二、指定理由」の「(二)説明」を左に引用する。後段には、この史跡指定が周辺の「開発」から応神天皇陵を「保存」するためのものであることが明瞭に示されている。

大阪府の南河内の平野、大和川の南岸、石川の西岸には、古墳時代中期、後期に属する数多くの巨大な古墳がみられ、古市古墳群とよばれている。その内容は、『延喜式』などによれば天皇や皇親の墳墓とされる古墳が極めて多く含まれており、西の堺市の百舌鳥古墳群とともに著名な古墳群とされている。この古市古墳群の中で最も雄大な規模をもつのは、第十五代、応神天皇の陵墓とされている古墳である。墳丘は全長四二〇メートル、後円部の径二五二メートル、その高さ三五メートル、前方部幅三三〇メートル、その高さ三四メートルをはかり、見事な三段築成の墳丘、一段と高くつくられた後円部や前方部の頂部、くびれ部両側の最下段に設けられた方形の造り出しを具えた典型的な中期の大古墳である。墳丘の外域には、前方部前方で幅五三メートル、西方では幅四〇メートル、後円部背後では二八メートル幅の内濠がめぐらされ、さらにその外側に、ほぼ全周四〇メートル程の内堤がまわっている。伝聞によれば、墳丘斜面には葺石がみられ、三段築成のテラス面の端には埴輪列が繞らされており、内堤上にも内外両縁に各一列の埴輪列が配置されていることが知られている。

以上の墳丘、内濠、内堤部分は、早くより宮内庁で応神天皇陵に治定されており、同庁の手で所管、管理されて来ているところである。

宮内庁所管地の外方、内堤の外側には幅四五メートル前後の外濠がめぐらされているが内堤に接し幅一五メートルの一段と深い湛水部を作り残り三〇メートル幅を空堀としている。この外濠の外方は幅約七〇メートルをはかる外堤―周庭が見られるが外濠に面する堤縁には円筒埴輪列がめぐらされており、その堤上に三基の陪塚を築造している。

以上の外濠、外堤は宮内庁の所轄外であり、東、北、南側は早くから集落となり、今日では西面の

みが旧状を良好にとどめているものの次第に開発が波及しつつあるため、積極的な保存が望まれてきた。

今回は外濠外堤に該当する西面の一部の保存を図ろうとするものであるが、この地は昭和五十一年、大阪府教育委員会による発掘調査があり、外濠空堀、外堤が発見されている地域である。

（右記は、著者による文化庁長官への行政文書の情報開示請求により、平成十八年三月九日付で写しを入手したものを翻刻したものである）

追記

本稿を成すにあたっては、令和二年度成城大学特別研究助成「臨時陵墓調査委員会における長慶天皇陵治定への動向―『調査ノ方針』に沿って―」（令和二年度）の交付を受けた。研究課題の名称と本稿のタイトルが異なるのは、本稿ではより大局的な視点から天皇陵をめぐる問題を明らかにしようとしたことによる。

また、本稿「三『世界文化遺産』として」は、拙著『天皇陵―「聖域」の歴史学―』（講談社学術文庫、二〇一九年一〇月）に載せた「学術文庫版のための補足とあとがき」の「世界遺産と天皇陵」の一部分を基本にしつつ、そこでの問題関心をさらに発展させた視点から著したものである。あわせてご覧頂ければ幸いである。